

41 高齢患者への腹膜透析導入 ～在宅支援を振り返る～

長野赤十字病院透析センター

田中真美 傳田規子 横澤典子

宮本真澄 須藤のり子

同腎臓内科

高橋寧史 市川透 出浦正

I はじめに

わが国の透析導入患者数は増加傾向にあり、患者の高齢化も進んでいる。高齢者の在宅治療は容易ではないが、家族の支援や適切な指導で可能になると考えられる。今回、腹膜透析（以下PD）を選択した、高齢腎不全患者のPD導入から在宅へ向けての支援を振り返り報告する。

II 症例

90歳女性、DM性腎症、娘と二人暮らし、バック交換は娘が行った。

要介護2：日常生活の起き上がり動作や車椅子への移動は自力で行えた。

透析条件：ダイアニールPD4 1.5%1000ml×3夜間貯留なし。

娘の性格：几帳面、まじめ。

III 経過

治療の選択に際し、血液透析及びPDの特徴を十分に説明し、患者と娘の「自宅で過ごしたい」という希望と、高齢で通院困難であることからPDを選択した。平成18年8月PD導入。その後特に問題なく娘がバック交換手技を習得したところで9月に退院。退院後、通常月2回の外来通院を1回とし、週1回の訪問看護と訪問入浴を実施した。退院後の経過は比較的良好だったが、総胆管結石にて黄疸をきたし、平成19年2月永眠された。

IV 看護展開

1. 導入期

1) 問題点

バック交換手技への不安。

2) 目標

確実にバック交換ができる。

3) 援助の実際

導入前にデモ機を使い練習し、バクスター社のポスターを使用し手順を確認しながら覚えてもらうようにした。また、早期よりバック交換を行ってもらい、娘のペースに合わせ励ましながらか指導した。

娘は几帳面でまじめな性格であり、年齢的にも一度に多くのことを習得するのは困難と考えました。そのため、ポイントを押さえ手順を区切り繰り返して行った。

表1

日付	反応
8/30	「初めてだから緊張するね。これでいいの？ここは触っても大丈夫？」
9/2	「自分でやってみたい」 一つ一つ声に出し実施している
9/13	手順を口に出し、間違えずに行える
9/16	「まだ見てもらわないと不安」
9/19	つまずいたところはメモしている
9/23	「夜のバック交換もやってみたい」 外泊、退院に向けて覚えようという気持ちが見える。手技習得できている。

娘は当初から「自分でやってみたい」と、高い意欲が見えた。しかし、手技の習得には時間がかかった。

手技をわかりやすく繰り返し説明することで一連の流れが理解でき、間違えたところや分からない事はメモをとって自宅で復習していた。

3週間程で一人でバック交換が出来るようになった。

2. 安定期

1) 問題点

カテーテル管理への不安。

2) 目標

カテーテルケアが行え異常がわかる。

3) 援助の実際

導入期と同様の関わりを行った。バック交換手技を覚えてから指導したことにより、カテーテルケアはスムーズに習得できた。

3. 在宅期

1) 問題点

退院後の日常生活への不安。

2) 目標

環境整備ができ不安が軽減できる。

3) 援助の実際

退院に向けて病棟、訪問看護ステーション、医師とのカンファレンスを行い、本人及び娘の抱えている問題点の把握に努めた。

緊急時の対応方法は数回に分け指導し、排液混濁の様子がわかるように牛乳を使い説明した。また、他のPD患者との面会を行った。

表2

日付	反応
9/21	家庭訪問 「家の中の段差が多くて大変、廊下も狭いし体重はどこでいつ量ればいいか」
9/26	試験外泊 本人「物が揃ってなくて落ち着かなかった」 娘「とても忙しかった。バック交換は一つ一つ確認しながらやっています」

早期から在宅への不安が聞かれたため家庭訪問を行い、ベッド、ポータブルトイレの位置の変更、加温器などの設置場所の提案、体重測定の確認、必要物品の確認をした。

試験外泊では大きなトラブル無く「家は良かった。」と笑顔で話された。また、安定しているPD患者との面会を通し「同じ患者様に会わせていただき、その前向きさに勇気づけられました。」との言葉が聞かれた。

V 考察

適切な時期に援助を実施し、必要に応じて他部門との連携を図り、サポート体制を整え、在宅支援へ向けての看護を実施することができた。

娘からも、「在宅で気兼ねなくゆったりとした時間が持てたことは良かったと思う。」「母は一度も治療を拒んだことは無く、具合の悪いときも進んで協力してくれ、終わると有難うと言ってくれました。」との言葉が聞かれました。本人と娘が納得した治療を選択したことで、安心して在宅で過ごす事ができたと思われる。

在宅での治療になれるまで、高齢者及びその家族には様々な負担や不安がある。このような時期に看護援助を受けられることは、在宅治療への意欲向上と不安の軽減につながる。娘からも「バック交換、出口部ケアのアドバイス、入浴の準備等心強い存在でした。」との言葉が聞かれ、高齢PD患者の在宅治療への移行には、支援体制の充実が重要と考える。

VI まとめ

各時期に合わせた問題点及び目標を明確にし、その時期に合った看護を行い、必要に応じて他部門との連携を図ることが重要となる。また、このような症例の場合、介護者の精神的負担や時間的制約は大きくなると思う。今後、高齢者の在宅支援看護は、家族へのサポート体制の充実を図る必要があると考える。

参考文献

- 1) 松崎いみ子：高齢腹膜患者に対するサービスの充実を心がけて、腹膜透析 2003：282-284, 2003
- 2) 金澤幸子：どのような終末期を迎えるか、透析ケア 13(4)376-380, 2007
- 3) 松本文子：高齢者 CAPD 患者の導入指導と看護、腹膜透析 2000：457-460, 2000
- 4) 嶋津友美：高齢者(75歳以上)をPD導入した家族の現状と対策—とくに看護の関わりについて—、腹膜透析 2000：454-456, 2000
- 5) 久米裕子：高齢者の腎不全治療法の選択について考える、腹膜透析 1998：83-85, 1998